

至誠

明治神宮武道場
至誠館 館長
荒谷 卓

武道教育が追求する道徳的な高み

新年には多くの武道場で寒稽古が行われる。真冬の寒さの厳しい中に、わざわざ冷たい水を浴びたり、海に入っ
て稽古をすることにどんな意味があるのだろうか。

米国の心理学者アブラハム・マズローが唱えた欲求段階説を使って、武道の稽古の目的の道徳的な高みについて説明してみよう。

マズローは人間の欲求を五段階に分けて整理したのだが、それによると一番

下層レベルに「生理的欲求」という人間が生きる上での根源的な欲求があるという。それが満たされると次の段階では「安全の欲求」、つまり暑さを避けようとか寒さを避けよう、危険なことを避けたいという欲求が出てくるとされる。これらは何も人間に限らず、鳥や獣でも持っている基礎的な欲求である。

寒稽古では、このような低次元の要求とは相反する行為をしているわけである。

次の段階は「他人とかかわりたい、

他者と同じようにしたい」といった「集団帰属欲求」がある。時々、我々の寒稽古にも大学のクラブに属して、「先輩に言われたから来ました」という者がいるが、そんな気持ちで参加するのはだめだと言いつけて聞かされている。自身で「今年は寒稽古を貫徹するのだ」という気構えがなければ、寒稽古に参加する意味がない。

その上層には「自分が価値のある存在だと認められ、尊敬されたい」という「承認欲求」がくるとされている。さらにその上の段階が「自己実現」、すなわ

ち自分の能力や可能性を発揮して自己の成長をはかりたい、夢を実現したいという欲求である。

一般的には、ここまでがマズローの「5段階の要求段階」と呼ばれている。しかし、日本武道で求めるものは、より高次元の要求である。そして、マズロー自身も後年その存在を認めている。それは、「コミュニティに対する貢献欲求」、つまり他者や社会のために役に立ちたいという欲求である。

現代社会においては「自己実現」が最高の道徳として位置付けられている

が、日本武道の教育では、それよりも道徳的に高い「世のため、社会のために尽くすこと」を目的とする伝統があり、それが普段の何気ない稽古を通じて無意識のうちに身につくように工夫されているのだ。

中核が強い社会は強くなる

武道の鍛錬とは究極的には精神と肉体の帰結するところを同一視するプロセスであり、身体を中心として躰下丹田を重視することが全ての基本である。したがって、武道において身体を鍛えるといった場合、それは身体を中心「躰下丹田を鍛える」ことを意味する。腕力や脚力のような末端の部分力ではなく中心力を鍛えることが重要なのである。

つまり、中心を鍛えて強くし、その力を手足を媒体として相手に作用させるという身体の使い方を訓練する。武道の鍛錬を通じて、この力の使い方を体感できると、次第に「精神の中核が強ければ人間として強くなる」という真理の発見につながっていく。

さらにこれに、「コミュニティに対する貢献欲求」が重なれば、当然、どのような社会が強くなるのかという点に考えが至るのである。

社会を二つの共同体と捉えるならば、心身の中核にエネルギーを集中した状態で身体と知能を柔らかく使えば強い力が出るのと同じように、社会

にも中核があつて、その中核を強くすれば社会もまた強い集団になるということに気づくはずである。

つまり、日本国家の精神的かつ機能的中心を明らかにして、日本国民の力をその中心に結集できれば、日本は確実に強くなるはずだ。

先の東日本大震災でも、多くの国民が「被災者のために何かをやりたい、復興のために少しでも貢献したい」と思っ
ても、その力を集約するポイントがないために、国民の思いと力が結集できずに、救済と復興は遅滞し、被災地の窮状が深刻化している。

現在の憲政下では、当然政府がその中核としての役割を果たさなければならぬのだが、「国民からの信頼」が欠如しているためにその役割を果たせず、結果として日本全体が弱体化してきている。

そこで、弱くなっている現在の日本を立て直すには、日本の歴史に学び、早急に中核となる「信頼できる人物」を立てることが重要だということになるだろう。

日本人は諸外国の人々に比べて、教育レベルも含めて国民の能力は均一化されているという特徴がある。日本人は皆一定以上に優秀な人々の集団であり、こうした集団を組織する際に、能力別の階層であるピラミッド式の組織構造は合わない。なぜならこれは能力差に応じた序列の階層だからだ。

仮に日本人を能力別に全員整列させ

たとすれば、ピラミッドのようにはならず、むしろ団子のようになるであろう。

このような国民の特質から言っても、能力のある人をトップに就けようとする、いたずらに派閥的競争や不平不満を作り出すだけで、団結力は薄れる。だからトップダウン式の組織では日本社会は弱くなる。

むしろ団子のように均一化された日本社会に相応しい組織形態とは、団子の集合体を中心をつくることだろう。つまり、誰もが信頼できる人物を中心置き、その中心人物の人格に皆が同意して各自が持っている実力を発揮するといった構造である。上から下に命令が降りていくのではなく、中心から全体に共通の目的意識が伝達していくという仕組みだ。

国家であるうと会社であろうと、そこまで根本的に現在の仕組み、組織の在り方を見直さない限り、現状を打開することは難しいだろう。このままでは政党は二大政党どころか、ほとんど分裂していくだけで、政治の混迷は深まるだろう。いくら選挙をやつても、信頼度の一番低いものと一番目に低いものを選択では、改善の見込みは全くない。

能力のあるリーダーが必要だと言われるが、今の日本に必要とされているのは、「どんな人からも間違いなく信頼される人」を中心据えることである。そしてその下で一度全面的に制度を見直すことである。

躰下丹田とはそういう名の臓器が

ある訳ではない。そこに意識を集中し、そこが中心だと意識するだけである。社会についても同じだ。そこが中心だと皆がイメージをできるならば、そこを中心に社会はうまく回っていく。

「全ては変わる」発想持つて見直せ

今年には明治天皇が崩御してから百年目にあたる。百年前の世界は植民地時代であり、殖民する側と殖民される側が明瞭に分かれていた。その殖民される側だったはずの国の一つ、日本が、殖民する側の国を打ち破り、勝者が敗者の生命財産を略奪する世界秩序に対抗して、民族協和を世界に広げるために日本国民は致団結して急速に国力を増進していた。

その時代から考えれば百年後の現在はまだたく想像もできないくらい違う世の中になっている。これから百年後はさらに加速度的に社会が変わるだろう。つまり百年後は、今とは全く違う世界になるということだ。

百年後にはどうせ今の世界は全て変わる。それならば現在の前提に従うのではなく、百年後には根本的に全て変わることを前提にして、「競争で勝った個人ではなく、社会共同体が成長できる世界」を再構築すべきだ。これほど行き詰った社会を見直すには、「変えられない制度や仕組みなどない、全てが変わるのだ」という発想からスタートすべきなのだ。